

# 指導者の豪気——台湾開発のこと

## 後藤新平年譜

年代	年齢	事項
一八五七年	……	六月四日(太陽暦七月二十四日)陸中国胆沢郡垣電村(現奥州市)吉小路に、留守家士後藤佐傳治實景と利忠の長男として生まれる。
一八六四年	……七歳	武下節山の家塾で漢学を学ぶ。
一八六七年	……十歳	留守那摩の奥小姓となる。武下塾をやめ、藩校立生館に入る。
一八六八年	……十一歳	幼兵に編入され、立生館を休学する。
一八六九年	……十二歳	胆沢県庁大参事安場保和の学僕となり、三ヶ月後に岡田俊三郎(後に阿川光裕と改名)に預けられる。
一八七一年	……十四歳	上京し、大政官小史莊村省三の学僕となる。
一八七二年	……十五歳	帰郷し、武下塾で詩文を学ぶ。
一八七四年	……十七歳	須賀川医学校に入学。
一八七五年	……十八歳	福島県病院六等生となり、医学校生徒取願(内合副会長)となる。
一八七六年	……十九歳	安場とともに愛知県へ転任した阿川邸に、愛知県病院三等医を拝命。医局診察専務となる。ローレツツ博士の指導を受ける。
一八七七年	……二十歳	公立医学所二等授業生となる。医術開業試験を受験、開業免許が授与される。大阪陸軍臨時病院の備医となる。名古屋鎮台病院備医となる。
一八七八年	……二十一歳	再び愛知県病院に、健康警察医官を設けるべきと安場県令に建白。衛生事務取調のため東京へ出張。「愛知県ニ於テ衛生警察ヲ設ケントスル概略」を内務省衛生局長・長与専齋に提出。
一八七九年	……二十二歳	愛知県愛業社を設立。
一八八一年	……二十四歳	国員県令に「聯合公立医学学校設立之議」建白。愛知医学長兼愛知病院長に任ぜられる。
一八八二年	……二十五歳	長与衛生局長から内務省衛生局長に採用の内命。板垣退助が岐阜で遭難、招かれて負傷を手当てする。
一八八三年	……二十六歳	父死去。内務省の御用掛。准奏任取扱。衛生局照査係副長となる。安場保和の次女和子と結婚。
一八八五年	……二十八歳	東京府下の下水掃除改修の件につき、内務大輔芳川顕正に復命所提出。
一八八七年	……三十歳	「普通生理衛生学」著す。パルトンがイギリスから来日し、後藤らと函館、青森などで衛生調査を行う。
一八八九年	……三十二歳	「国家衛生原理」発表。
一八九〇年	……三十三歳	在官のまま自費によるドイツ留学。ベルリンでの第十回国際医学会に出席。「衛生制度論」発行。
一八九二年	……三十五歳	ミュンヘン大学で医学博士の学位を得る。帰国後、内務省衛生局長になる。
一八九三年	……三十六歳	長男一藏生まれる。相馬事件で拘引、収監、非職(翌年、保釈、無罪)。
一八九五年	……三十八歳	石黒忠忠の推挙で中央衛生委員会となり、日清戦争からの帰還兵検疫に關して児玉源太郎、石黒忠忠と協議。臨時陸軍検疫部事務官長となり、広島に着任。検疫所を建設し、検疫を始める。検疫を終了し、再び内務省衛生局長となる。台湾の阿片政策について伊藤博文に意見書を呈する。
一八九六年	……三十九歳	台湾総督府衛生顧問を嘱託される。台湾での酒・煙草の製造販売を無税にすることを建白。
一八九八年	……四十一歳	台湾総督府民政局長(のち民政長官)となる。
一九〇二年	……四十五歳	新渡戸稲造とともに欧米視察。
一九〇三年	……四十六歳	貴族院議員に勧擧される。

私が奉職している拓殖大学は一九〇〇(明治三十三年)に設立された台湾協会学校が淵源である。日清戦争の勝利によって日本が清国から割譲を受けた台湾は、日本初の海外領土である。この地を開発する若い人材養成のための教育機関が台湾協会学校であった。同学校は一九一八(大正七年)に創立二十周年を迎え、後藤新平が第三代の学長に就任。後藤の指導下で台湾協会学校は一九二二(大正十一年)に拓殖大学に昇格した。拓殖とは「開拓殖民」の意である。後藤は一九二九(昭和四年)四月の死去までの十年間、拓殖大学の発展に貢献した。

後藤の業績は実に多岐におよぶが、ここでは台湾開発についての氏の卓越した思想と行動のことを記しておきたい。後藤の台湾経営の哲学は「生物学的植民地論」として知られる。個々の生物の生育にはそれぞれ固有の生態的条件が必要であるから、一国の生物をそのまま他国に移植しようとしてもうまくいくはずがない。他国への移植のためには、その他の生態に見合うよう改良を加えねばならない。本国日本の慣行、組織、制度を台湾のそれに適応するよう工夫しながら植民地経営がなされるべきだ、概略さういう主旨である。武断型の植民地支配とは一線を画する経営思想であった。

台湾に古くから存在している慣行制度を究め、このいわゆる「旧慣」に見合うような制度的工夫

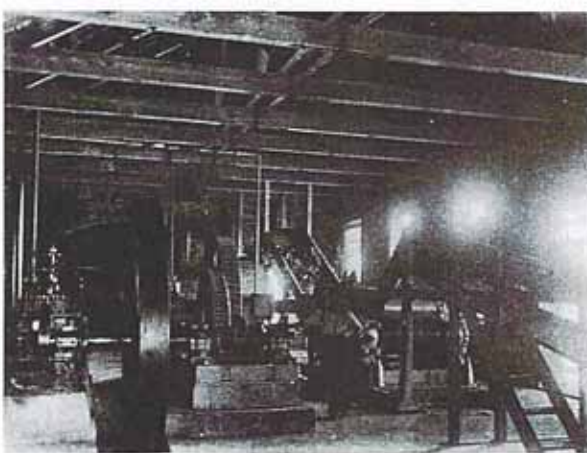
- 一九〇五年……四十八歳……満韓地方へ出張。奉天の満州軍統司令部を訪れ、児玉総参謀長と会談。
- 一九〇六年……四十九歳……男爵を授けられる。台湾総督府民政長官を免ぜられ、南滿州鉄道株式会社総裁を命ぜられる。
- 一九〇七年……五十歳……巖島にて韓国統治について伊藤博文と激論(巖島夜話)。
- 一九〇八年……五十一歳……ロシア皇帝ニコライ二世に謁見。桂首相に満鉄を通信省の管轄とすること、その他の条件を出し、通信大臣就任を承諾。満鉄総裁を免ぜられる。台湾総督府顧問、関東都督府顧問を免ぜられる。鉄道院官制公布。鉄道院総裁兼任となる。
- 一九〇九年……五十二歳……韓国統監を辞した伊藤博文とロシア宰相コッソフのハルビン会談を準備。十月十四日、出発する伊藤を見送る。鉄道院職員の新制を制定。
- 一九一〇年……五十三歳……新設された拓殖局副総裁を兼任。鉄道広軌改築案の骨子をつくる。
- 一九一一年……五十四歳……拓殖局副総裁免ぜられる。東京、下関間を広軌化する案について、広軌鉄道改築準備委員会報告書提出。内閣に提出するも、桂内閣総辞職により、**通信大臣および鉄道院総裁を免ぜられる。**
- 一九一二年……五十五歳……腹案による戯曲「平和」発刊。桂太郎とロシアを訪問。明治天皇崩御の報に接し、帰国。第三次桂内閣で通信大臣兼鉄道院総裁、拓殖局総裁となる。
- 一九一三年……五十六歳……桂の新党結成発表に立ち会う。桂内閣総辞職により、通信大臣、鉄道院総裁、拓殖局総裁を免ぜられる。立憲同志会から脱退。
- 一九一六年……五十九歳……寺内内閣の**内務大臣**兼鉄道院総裁となる。閣議で広軌準備復活を要請する。
- 一九一七年……六十歳……臨時外交調査委員、拓殖調査委員会委員長となる。都市研究会発足。会長に就任。
- 一九一八年……六十一歳……実験に基づく、国有鉄道開闢変更案発表。和子夫人死去。外務大臣に任ぜられる。シベリア出兵問題についての元老会議に出席。寺内内閣総辞職、外務大臣を辞す。
- 一九一九年……六十二歳……ハルビン日露協会学校創立委員長となる。拓殖大学学長に就任。欧米視察。米國を経て帰国。
- 一九二〇年……六十三歳……日露協会会頭就任。「大調査機関設置案」について原首相、横田法制局長官と協議。**東京市長就任。**
- 一九二一年……六十四歳……市長俸給全額を市に寄付すると表明。東京市政要綱へ**八億日計画**を市参事会に提出。以前から懇請していた市政調査会会館建築費寄付などについて、安田善次郎から書状がもたらされる。
- 一九二二年……六十五歳……安田家から東京市政調査会設立費として三百五十万円の寄付。財団法人東京市政調査会設立認可され設立。会長。東京連合少年団設立後、**少年団日本連盟の初代総裁**。子爵に陞爵。北京滞在中のソ連駐華全權代表ヨッフェに、電報で病氣療養のため日本に招き、会談。赤化防止団員が自宅に乱入し、家財道具などを破壊。暴漢により長男一歳が負傷。東京市長辞職が認可される。ヨッフェに日ソ交渉は政府の手に移ったことを伝達。九月一日、関東大震災。第二次山本権兵衛内閣が成立し、内務大臣。「**帝都復興の議**」を閣議に提出。帝都復興審議会委員に任ぜられ、幹事長。帝都復興院総裁兼任。ピーアド博士来日。
- 一九二三年……六十六歳……北京滞在中のソ連駐華全權代表ヨッフェに、電報で病氣療養のため日本に招き、会談。赤化防止団員が自宅に乱入し、家財道具などを破壊。暴漢により長男一歳が負傷。東京市長辞職が認可される。ヨッフェに日ソ交渉は政府の手に移ったことを伝達。九月一日、関東大震災。第二次山本権兵衛内閣が成立し、内務大臣。「**帝都復興の議**」を閣議に提出。帝都復興審議会委員に任ぜられ、幹事長。帝都復興院総裁兼任。ピーアド博士来日。
- 一九二四年……六十七歳……社団法人東京放送局総裁となる。
- 一九二五年……六十八歳……東京放送局放送で、挨拶を放送。満州、朝鮮への旅に出る。奉天で張作霖と会談。加藤高明首相を訪ね、極東拓殖会社創立について意見を述べる。芝罘宥山の新放送局で、本放送開始の挨拶。
- 一九二六年……六十九歳……少年団総裁として挨拶を放送。「公民憲本」を刊行。建國祭に参列後、脳溢血で病臥。青山会館において「**政治の倫理化運動の第一声を発する**」普通準備会の綱領会則発表。パンフレット、政治の倫理化、発行。
- 一九二七年……七十歳……日独文化協会設立。会長となる。青山会館で政治の倫理化運動一周年記念大講演会を開催。田中義一首相を訪問。対華外交の重要性を警告する。二回目の脳溢血。ソ連訪問。外務人民委員代理カラハンと会見し、漁業協約について話す。中央執行委員会議長長カリーニンと会談。
- 一九二八年……七十一歳……共産党中央執行委員会で党書記長スターリンと会談。市政会館の定礎式を行う。伯爵に陞爵。少年団日本連盟総裁として団員四千人とともに、築地海軍大学校付属地で、天皇の御親臨を賜る。
- 一九二九年……七十一歳……国民に対する遺言として、電力、保険、アルコール含有飲料の三大国営案を手記する。米原付近の車内で三回目の脳溢血発症。四月十三日、逝去。享年七十一。四月十六日、青山墓地に埋葬される。

をしなければ優れた海外領土経営など不可能だ  
という恰かな思想の持ち主が後藤であった。

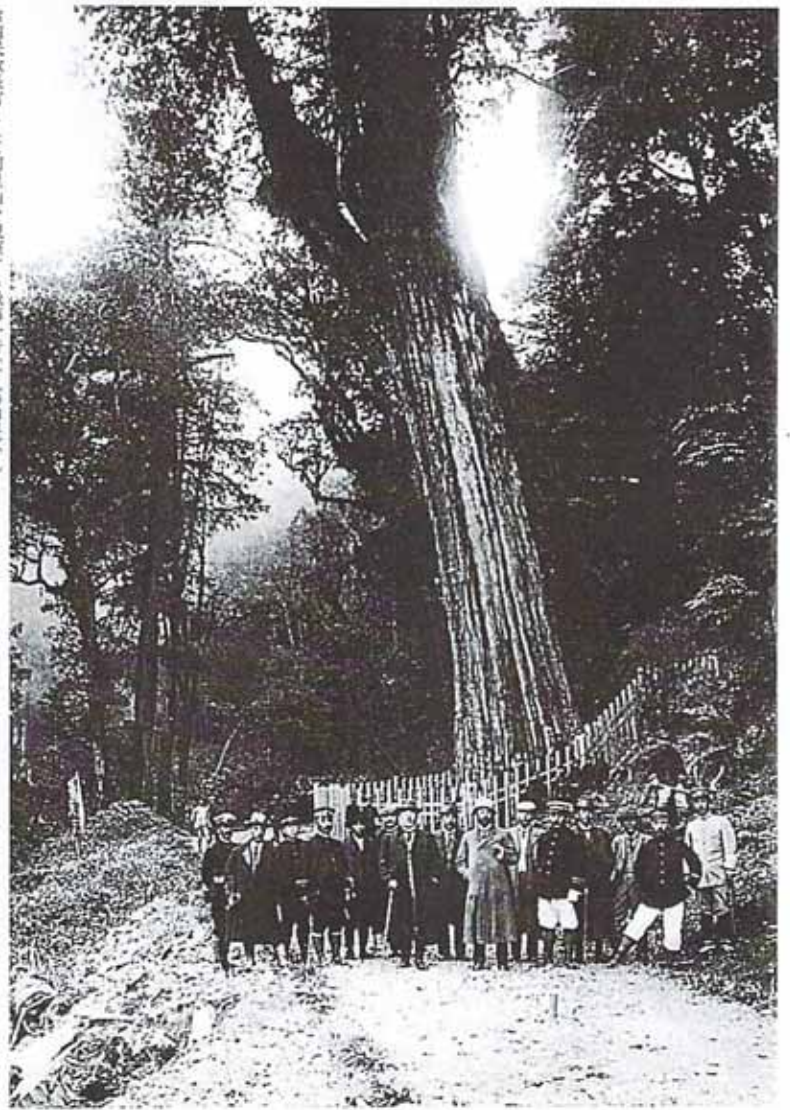
この思想が典型的にあらわれたのが、台湾人の長い悪慣である阿片吸引の禁止であった。下関での日清講和会議でも李鴻章が伊藤博文に対し、貴國は台湾では阿片に手を焼くよと捨て台詞を吐いたというエピソードが残っているほどである。

阿片吸引者から阿片を一挙に取り上げるわけにはいかない。後藤は「阿片令」を出して阿片専売制度を設けた。阿片販売者を指定された特定の仲売人と小売人に限定し、すでに阿片中毒にかかっている者のみにこれを購入させる通帳を保持させ、新たな吸引者には通帳を絶対に交付しないことにした。当然ながら阿片価格は旧

台湾総督府民政長官として新設戸橋造とらに事業の奨励をした福新製糖会社製糖工場(一)







台湾民政長官として阿原山を視察する後藤（行二九〇四号）

今のように政党が腐敗墮落しては、帝国の憲政は滅亡するより他はない。  
この際国民が奮起し政党が覚醒するにあらずんば、悔を千載にのこすようになるぞ

来に比して高価に設定した。これにより阿片吸引者は漸減し、加えて専売収入の増加にも寄与した。

また、後藤は台湾に古い来歴をもつ「保甲」を利用した密度の濃い統治制度を確立した。保甲とは十戸を一甲、十甲を一保として甲長と保長をおき、保甲内の相互監視と連座制を徹底した制度であった。戸籍調査、出入者管理、伝染病予防、道路・橋梁建設、義務労働員などがすべ

てこの保甲を通じてなされた。保甲は日本の台湾統治のためのきわめて効率的な住民組織として機能したのである。

さらに後藤がなした刮目すべき成果は、土地・人口調査事業の完遂であった。後藤はこの事業をもって経営さるべく託された台湾の現状を徹底的に調べ尽した。土地調査事業の着手は後藤の台湾着任後わずか半年のことであった。調査を通じて全土の耕地面積・地形を確定し、地租徴

収の基盤を整えた。続いて林野調査事業を始め、台湾全土の山林地帯の面積・地形を確定し、所有関係を整備した。一九〇三（明治三十六年）には「戸籍調査令」を発令し、これにもとづき本格的な人口調査を行った。

後藤の治世下、台湾の植民地経営の基礎は急速に整えられた。鉄道、港湾、空港、電話網など多様な公共事業が展開された。台湾の公共事業は往時の他の植民地に類例をみない充実ぶりであった。台湾銀行を着任の翌年に設立、間もなく台湾銀行券を発行、公共的構造物の建設に要する大量の資金が同銀行の事業公債により調達された。

「米糖経済」。台湾の農業発展基盤も日本統治時代に飛躍的な伸びをみせた。製糖事業の近代化のために後藤が台湾に招いたのが、札幌農学校で教鞭を執っていた新渡戸稲造であった。新渡戸は、当時アメリカで「武士道」を書き上げ、札幌に戻る直前に後藤からの招聘状を受け取った。新渡戸は総督府の糖務局長に就任し、後藤に背を押されながら台湾糖業の飛躍的發展に貢献した。ちなみに新渡戸は後藤新平学長の下で拓殖大学第一代学監をも務めた。

後藤の台湾統治原理は「搾取」などではまったくない。古い歴史伝統と柵しがらみを持つ日本においては、容易に試みることのできない企図を、新天地・台湾で展開してみようという、実に気宇壮大なものであったというべきであろう。

台湾における後藤の思想と行動は、明治日本の指導者の豪気を示して余すところがない。